

編集者のことば

小林 和 正*

人口研究はもともとローカルな小地域の実証的研究として出発したといつてよい。中央集権的な権力を背景とした統計調査によって一国の住民の数というものが分かり、それについて考察をめぐらすということは、あとの時代になってからのことで、まして地球上の人口を計数をもって論ずるなどということは、人類総数の人口学的推計が、国際協力に支えられて比較的恒常的なベースに乗りはじめた最近のことに属する。しかし、こうして経験的データにもとづく地域の人口研究は、村落レベルから地球的規模に至るまでのさまざまなひろがりにおいて展開されるようになった。そのような対象地域のレベルの差異は、問題意識、方法論、関連領域とのかかわり方などにおけるちがいを常に伴っている。

地域における人口現象は、地域のあらゆる人間活動の可能性の基盤であるとともにその所産でもあって、人口学以外の諸領域での地域研究においても、それぞれの必要に応じて、人口現象の特定の局面が研究対象の一部として取り上げられていることは珍しくない。人口の人口学的研究は、人口現象をより体系的に研究するというだけのことであるといつてもよい。その体系的な研究というのは、人口を一つの首尾一貫したシステムとしてとらえ、その変動を解明することであろう。

人口は、その現象が社会・経済・環境との間に相互依存関係をもつという点で開放系であり、人口研究の学際性が要求されるのもそのためであるが、人口自体の構造と動態とが互いに規定し合つて一つの自己完結性をもっているという意味では閉鎖系でもあって、デモ

グラフィーの専門性が認められるとすれば、それは、人口現象がそういう性質をうちにもっていることにもとづくものであろう。出生、死亡、結婚、移動はそれぞれが別個の研究対象になりうるが、これらの要素は時間的、世代的経過の中で相互に規定し合いながら、一つの全体としての人口過程を導いてゆく。地域研究としての人口研究は、例えば出生力研究や人口移動研究などに特化するのではなく、人口学的に総合的なアプローチをもつことが望ましい。

ここに企画した人口特集は、3篇の論文からなるささやかな構成であるが、いずれも、人口増加を課題にしているという点で共通性をもっている。人口増加（減少）は、あらゆる人口学的要素がそこに包含された一つの複合的人口過程であつて、単なる数の増減のことではない。総合的人口研究の基本的なテーマは、まさに人口増加に集約される。しかし、所収の3篇は、それぞれ異なる地域レベルを代表し、異なる問題を論じている。開放系であると同時に閉鎖系でもあるような人口の矛盾的存在について、最も理論的な考究をせまられるのは、人口の将来予測においてであり、河野論文は地域的に巨視的な立場をとりつつ、東南アジア地域の将来の人口過程を予測するための基本的な考え方について論じた。小林論文は、タイ一国の最近の人口増加に問題の基本をおいた実証的研究であり、坪内・松下論文は、南スマトラの一地方で採集された資料を解析し、歴史人口学的問題を提起した。今回は本誌最初の人口特集であるが、将来は東南アジア人口学の課題をより多面的に取り上げてゆきたいと考えている。

* 京都大学東南アジア研究センター

Editor's Note

Kazumasa KOBAYASHI*

Demography is essential in the multi-disciplinary, if not interdisciplinary, research of a region because population structures and movements are closely interrelated with the environmental, socioeconomic, and political conditions of the region. It is not uncommon for non-demographers involved in a regional study to deal with population variables as an integral part of their research subject. Population is not a subject exclusively studied by demographers. A demographic approach differs from population studies practiced by other disciplines only in that it emphasizes studying population in terms of all its demographic components. This approach is particularly required of demography when it is applied with other related disciplines in a regional study, irrespective of whether the area for research is a village, a larger subnational area, the whole country, or a world region.

This is a collection of three papers on population in Southeast Asia. Although they differ from each other in themes as well as levels of area for study, all are concerned with the phenomenon of popu-

lation growth. The growth of population is not a mere change in the number of people, but is a complex of population dynamics in which all the demographic components interact with each other over time and generations.

Shigemi Kono reviews, in the first paper, the basic theories underlying the practice of the United Nations and other international population projections, including those of Southeast Asia, and discusses the utilization of new developments in population theories for projections. Kazumasa Kobayashi describes, in the second paper, the subnational diversity in the population growth of Thailand during the intercensal period from 1960 to 1970 and draws special attention to the role of the sparsely inhabited hill regions which have been absorbing much of the increase. Yoshihiro Tsubouchi and Keiichiro Matsushita attempt, in the third paper, to estimate the extent of population growth of the several past generations in South Sumatra through the use of genealogical records of two local populations and suggest the possibility of high levels of net reproductivity since several generations ago in remote rural Sumatra.

* The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University